

# ウクライナに「コメデイアン大統領」が誕生

拓殖大学海外事情研究所教授 名越 健郎



Kenro Nagoshi

ウクライナの大統領選決選投票が4月21日に行われ、政治経験のないコメデイー俳優のウオロディミール・ゼレンスキー氏(41)が73%の得票で圧勝した。東部の内戦や経済危機が長期化し、国民の約1割が欧州など国外に移住するという停滞の中で、既存政治家への不満が高まり、政治・社会の刷新を訴えて地滑りの勝利を収めた。素人政治家だけに綱渡りの治世となるが、その勝利は旧ソ連圏全体を覆う閉塞感に一石を投じる可能性がある。

## 停滞打破で現職を圧倒

決選投票はゼレンスキー氏と現職のポロシェンコ大統領(53)の一騎打ちとなり、投票の2日前、7万人を収容する首都キエフの五輪スタジアムで両候補による討論会が行われ、テレビ中継された。

ゼレンスキー氏は、「私は政治家ではない。現在のシステムを打破するために来た一市民だ」「汚職と腐敗を一掃し、既存政治を打破する」「最も裕福な大統領を持つウクライナがなぜ最貧国なのか」などと巧みに政権交代を訴えた。ポロシェンコ大統領

ゼレンスキー氏はむしろ、トランプ大統領に近いかもしれない。トランプ氏もテレビ司会者を務めて知名度を高め、敵を作る独特の手法で大統領選を勝ち抜いた。ポピュリズムを利用した点では同じだが、生まれた時から特権階級だった億万長者のトランプ氏と違って、ゼレンスキー氏は普通の家庭に生まれ、ゼロから国家元首に上り詰めた。世界でも前例のない指導者と言える。

## 内戦で1万3000人が死亡

勝因は、ウクライナ社会に広がる閉塞感を受けて現状打破を掲げたことだろう。旧ソ連でロシアに次ぐ第二の共和国だったウクライナは、国民の民度が高く、農業や工業の潜在力を持つが、親ロシア派と親欧米派の対立が続き、政争が深刻化して経済改革が遅れた。エネルギー資源に乏しく、原油高が経済を直撃し、欧州最貧国の一つとなった。

2014年のロシアの干渉により、南部のクリミア半島をロシアに併合され、返還の見通しはない。ドネツク州などロシアの影響力が強い東部では、ロシアの支援を受ける親露派勢力が中央政府からの分離独立を宣言し、内戦が続く。内戦による死者は一般市民も含めて5年間で1万3000人に達したが、収拾の見通しはない。

ウクライナ危機直後の大統領選で国民は、「チョコロート王」と呼ばれる親米派の新興財閥、ポロシェンコ氏を選出したが、その後の経済危機や汚職・腐敗の拡大で民心が離れた。閉塞感が社会に漂う中、不満の受け皿として登場したのがゼレン

氏は「徴兵を忌避した人物がプーチンのロシアに対抗して国家を守ることはできない」「彼を勝たせたら、プーチンの思うつぼだ」などと危機感をあおったが、23%の得票にとどまった。

大学時代から社会風刺のコメディアンとして活動してきたゼレンスキー氏は、教師が大統領に当選し、問題を解決していくテレビドラマ「国民の奉仕者」で大統領役を務めて評判を呼び、今回、ドラマを地で行く形になった。選挙戦では、遊説を避け、ソーシャル・メディアを駆使して若者らの支持を集めた。

経済や外交は素人で、公職に就いたこともなく、側近も少ない。既存政党や議会に基盤を持たず、巧みな弁舌と喜劇役者特有のユーモアのセンス、国民的な人気頼みの異色の大統領となった。

タレント政治家は世界に多いが、最高指導者に就くことはめったにない。俳優出身という点でレーガン元米大統領と重なるが、レーガン氏はカリフォルニア州知事を二期務め、共和党の重鎮として政治活動も豊富だった。共和党も全力でレーガン氏を支え、外交安保政策で重厚な布陣をして冷戦終結に導いた。

スキー氏だった。

## プーチン政権にも風穴？

同氏が勝利演説で、「旧ソ連のすべての国民に言いたい。ウクライナを見てくれ。やればできる」と訴えたことも象徴的だった。

ソ連崩壊から28年がたつが、欧州連合(EU)入りしたバルト三国を除く旧ソ連諸国では、共産党時代の幹部や新興財閥とつながる利権主義者らが不正選挙を通じて当選し、軍や情報機関と組んで政治・経済的利権を維持してきた。その結果、汚職・腐敗や貧富の格差が広がり、社会に不満が広がった。その意味でも、ゼレンスキー氏の当選は旧ソ連諸国では極めて異例だ。

プーチン大統領による強権統治が19年に及ぶロシアでも、経済不振で生活苦が高まり、国際的孤立や社会の停滞など閉塞感が強まっている。

ロシアの反政府指導者、アレクセイ・ナワリヌイ氏はツイッターで、「ウクライナ国民を祝福したい。旧ソ連の領域で、公正な選挙が行われるのは異例のことだ」と祝福した。ロシアの政治評論家、アレクサンドル・バウノフ氏は、「ロシア指導部は、反露的なポロシェンコ大統領が落選し、経験不足の新大統領が登場することに安堵しているが、プーチン政権は長期的には、選挙を悔やむ結果になるかもしれない」と予測した。

民族的に近いウクライナの新展開は、旧態依然のプーチン体制にも風穴を開けるかもしれない。

(5月5日)

M O V E M E N T